

長白・通化からの引揚記

福岡県 松崎 伸子

一 開戦までの満州での生活

昭和十(一九三三)年満州国新京(長春)市で、父城台正、母セツの長女として私は生まれた。父は満州国の官吏であった。明治三十六(一九〇三)年長崎県千々石町生まれで、生家の作り酒屋の倒産や父の死などのため、幼少から苦学を続けて上海の東亜同文書院に学び、昭和九年、満州国司法部官吏となった。母は、大正元(一九一二)年長崎県口之津町で生まれた。母の父は、外国航路貨物船の機関長であった。母は結婚前三年間、小学校で教師をしていたが、昭和八年七月に結婚して満州に渡った。満州での暮らしについて、母から詳しくは聞いていないのだが、父の勤務地、子供の出生地についてメモを書き残していた。それによると、私が新京で生まれた次の年、父は内蒙古

肺炎を患い母が一心に看病していた姿、飼い犬のセッターが仔犬を何匹も産んだこと、また春になって中国の祭りの娘(にやん)娘祭りが賑やかで、着飾った人の群れ、そして高足踊りが珍しかったことなどを憶えている。その年の四月、父は錦州市へ地政局地政科長として赴任した。一戸建ての官舎の庭には大きなアカシアの木があり、夏には涼しい木陰で遊んだ。父の役所への通勤には、銀色の馬車を送り迎えしていた。

二 開戦

昭和十六年十二月八日第二次世界大戦が始まった。翌十七年四月私は錦州市向陽在満国民学校に入學した。赤いランドセル、セーラー服が嬉しかった。夏休みの一日、学校の遠足で葫蘆島へ海水浴に行った思い出がある。

三 新京での生活

昭和十八年父が新京国務院の地政総局に参事官として転任になった。そこで三男が生まれた。上の弟が一年生となり、私は二年生になって、新京

興安西省の開魯へ転勤になり、一家は小型飛行機で移住赴任したという。開魯で長男になる弟が生まれたが、母は慣れない土地での生活に苦労したようだった。翌年には同省の巴林右翼旗へ参事官として転勤、家族も大板上に移る。在任中に、父は蒙古の法律を調査、翻訳して出版した。また日本から巡業中の大相撲を招き、蒙古の相撲力士との親善相撲を行ったとも聞いた。昭和十三年に妹が新京で生まれた。その年の十二月には、吉林省転勤となった。翌年八月私の股関節脱臼治療のため父一人を残し、家族は東京へ移り住んだ。

その時期、父方の祖母が島原市から東京に来て、一緒に暮らした。昭和十五年二番目の弟が生まれた。ときは紀元二千六百年で、「金鶏輝く日本の」と国中が歌い祝った。私の病氣も回復し、昭和十六年一月に父が迎えに来て、再び家族は満州へ、祖母はまた島原へと帰って行った。

住んだのは通化省臨江の官舎だった。このころから、私の満州での記憶が残っていて、父が重い桜木在満国民学校へ通うことになった。桜木校は校舎も立派で、各教室にスチーム暖房が入り、校庭も広かった。生徒数は憶えていないが、各学年四、五学級ではなかったかと思う。冬になると校庭には円形の土手を作り、水を流し込んで凍らせてスケートリンクに早変わりした。通学は上級生が指導して、一年生から六年生まで一緒に集団登校だった。

次第に戦況が厳しくなってきたのか、朝礼での校長先生の話も、毎回のように「戦地の兵隊さんのことを思い、小国民の心構えをしつかり持って、勉強や勤労奉仕に励むように」とのことだった。引率されて兵隊さんたちの慰問に行き歌ったりしたりし、近くの神社に参拝して武運長久を祈った。また、絵や作文を、戦地へ送る慰問袋に入れた。校庭の片隅を耕し、カボチャや馬鈴薯など植える作業時間も増えた。校長室には御真影が納められていて、生徒はその前を通るときは必ず立ち止まり、礼をするように指導された。

食料は配給制で、大豆などを入れた御飯や代用食が多くなった。おやつのため玉の配給を並んで買ったことを思い出す。家の小さな庭にも、親子で楽しみながらトマトなど野菜を作り、カボチャは良くできて冬まで保存していた。

新京は、満州国の首都として建設された都市なので、街並も美しく整っていた。町の中心部には、路面電車が通っていた。新しく建てられた住宅も、当時最新の設備が整っていた。私たちが住んだ官舎は順天区大興路で、二階建て四軒続き、スチール暖房、水洗トイレ、都市ガスと整備されていた。窓は二重窓で、冬には食品の貯蔵に使ったり、凍り豆腐を作ったりと便利だった。風呂は石炭で沸かしていたようだ。近くに野原があり、大きな子も小さな子も一緒になって遊んだ。冬、雪が積ると、箱に板を付けた父の手作りの櫓で坂道を滑り降りたり、近くの順天公園の池でスケートをするのが楽しみだった。ときには電車に乗り、家族で街へ出た。宝山、三中井百貨店での買い物や、

人は少なかったが、県公署のほか、県政中枢としての各機関があり、また国境地帯警備の一要地となっていた。恵山会誌によると、木材関係の会社が多く、その木材を鴨緑江の豊かな流れを利用し、筏にして流す様子は雄壮であると記録されている。長白と恵山鎮は、鴨緑江に架けられた恵長橋で結ばれていた。厳しい冬から春になると、長白は新緑の山、川の雄大な流れ、豊かな大自然に囲まれて、戦時中とは思えない開放感があった。

山の斜面に建てられた官舎から七、八分ほどの、長白在満国民学校へと通った。先生は校長先生一人で、全校生徒数十十余人、一つの教室で高学年、低学年に分けての授業だった。学校は昭和十八年ころ設置されたらしく、それ以前は対岸の恵山鎮の学校へ通学していたそうである。長白の学校が新京とはあまりにも違うので驚いたが、次第になれてくると家族的な雰囲気楽しかった。一学期が終わると夏休みに入ると、誘い合って鴨緑江に遊びに行った。川辺で水遊びをしたり軽石を拾った

映画を観るのも楽しかった。ニュース映画は日本軍が勝つ場面ばかりで、日本は強いんだ、必ず勝つと信じた。

昭和二十年の二月に四男が生まれた。そのときは、母方の祖母がはるばる内地からお産の手伝いに来てくれた。一カ月後祖母は無事戻ったが、そのころになると戦況はいよいよ厳しくなって、船旅も危険であったという。祖母が帰国した次の船便は、爆撃により沈没したとのことだった。内地に送った四男の出生届や、写真などは届いていなかった。四月に妹が一年生になった。が、そのとき父の転勤が決まった。

四 長白での生活

父が通化省長白県の副県長として赴任することになり、一家は新京をあとにした。汽車を乗り継ぎして二、三日を要し長白に着いた。長白は、白頭山から源を発する鴨緑江を境とする国境の地で、対岸は朝鮮の恵山鎮である。恵山鎮は日本人も多く、活気のある街と聞いた。一方、長白街は日本

り、ときを忘れて遊んだものだった。朝鮮の女の人たちが、石の上に衣類をのせ棒でたたいて洗濯したり、頭の上に物をのせて歩く姿ものどかな眺めだった。

五 終戦

八月十五日、その日は夏休みの出校日で、帰り道、向こうから歩いてくる父に出会った。私たちを見つけると「早く家に帰るように」と声を掛け、足早に去った。いつもと違う感じになり不安な気持ちで帰ると、母から日本が戦争に負けたことを聞いた。その日を境にして生活は一変した。夕方帰宅した父は、夕食を前に話を始めた。戦争に負けた日本人のこれからのこと、この地を去って日本に帰るのだという話から続いて、父は自分の生い立ちを語り始めた。「幼いとき父と死別、母とも別れ、寺へ小僧として預けられたが、自分の意志を貫くため、寺を出て苦学しながらここまで生きてきた」と話した。子供たち一人ひとりにこれから強く生きてほしいと、との願いを込めての父の

言葉だった。父への思いと戦争に負けた悔しさで、母も子供たちも泣いた。

翌朝、生徒は学校に集められ、改めて校長先生から「日本の敗戦、そして先生のご兄弟二人を含む戦死者への思い」などのお話を伺い、これが長白在満国民学校最後の朝礼となった。

そのころになると、もう周囲の満人、朝鮮人たちの視線が今までと違うのが感じられ、何か不安で落ち着かない毎日だった。

外務省外交資料館に保管されている外務省調査書の「通化省概況」に、「八月二十一日、副県長、城台正を会長とする日本人民会が結成された」と記録されているが、その当時の父は毎日忙しそうで、日中はほとんど家にいなかった。

やがてソ連兵が進駐してきて、銃を構えて日本人の家庭に土足で上がり、「トツケ（時計）、トツケを出せ」と言い、さらに家捜しをしてめぼしい物を奪って行った。負けた身の悔しさで、ただ見ているしかなかった。

六 父の連行

終戦から一週間ほど過ぎた日の夕方、父は珍しく家にいた。数人のソ連兵が来て父を連行した。トラックの荷台に乗せられた父を不安な眼で見つめる家族に、「すぐ帰ってくるから」と笑みさえ浮かべ、手を挙げて別れを告げた。それが父の姿を見た最後だった。ソ連兵の駐屯地である、恵山鎮へ連行されたのだった。父のほかに長白から日本人が一人、満人が数人、さらにその後二、三人が連行されたようだった。恵山鎮でも、何人かの人が連行されたと聞く。

父から電話が掛かってきたのは、それから二、三日後のことだった。突然のことで驚いたが、用件は「夜寒いので着る物がほしい」とのことだった。話したいことが山ほどあったことと思うが、囚われて監視されている身で電話ができたことが、今でも不思議に思われる。

次の日に、父の使いだと言って一人の朝鮮人がやってきた。母はラクダのシャツの上下を、そのつたが、大きさも重さも、持って行けるものは限られていた。

男の服の下に着せて父へ託した。無事父の手元に届き、寒さをしのいでくれるようお願いを込めて。

二、三日後、ソ連兵二、三人が家宅捜査に来て、写真などを押収して行った。恵山鎮の留置場では、同じ房に入れられた人たちが、「この先どのような事態になるか分からないが、最悪の場合でも、日本人として立派な死に方をするよう覚悟しよう。そして家族は無事に故郷にたどり着いてほしいこと。このことは一人でも無事に出獄できたら、各々の家族に消息を伝えるようにしよう」との話し合いがなされたとのことであった。このことは、後に私たち家族に伝えられた。

七 臨江へ

父の帰りを信じて待ちながらも、長白を去る日は迫ってきた。母は出発の準備に忙しかった。独身寮の小母さんが手伝いに来て下さった。帯芯を使って子供それぞれにリュックサックを作り、着替え、食糧を入れた。食糧は米、缶詰、小麦粉を炒った物（すぐ水で練って食べられた）などであ

九月三日早朝、出発のときがきた。父の消息も分からず、後ろ髪を引かれる思いだった。母が三弟を背負い、独身寮の小母さんが七カ月になる四弟を背負ってくれた。子供たちは、リュックサックを背に、水筒を肩からかけた。集合場所に着くと、大勢の人が旅支度で集まっていた。友だちの顔も見えて、少しは心強くなった。そこから乗船場所まで歩いて行くのだが、小さな子や体の弱い人のためには、荷馬車が用意されていた。一晩野宿もしたようだったが、よく憶えていない。五日に鴨緑江岸の半截溝に着き、四隻の川舟に乗り込んだ。四十人あまりの、大人と子供がやつと座れるくらいの広さだった。満人の船頭が櫓を漕ぎ、舟は臨江に向けて川を下り始めた。昼間だけ下り、夜は岸に舟を止め、川原で食事を作り、舟の中で寝た。川を下る途中でも、何度もソ連兵により停舟させられ、お金や時計などが奪われた。それは、

十三回に及んだと聞いている。

三日目ごろ、一隻の舟がソ連兵の検問を受けていて遅れた。追いついた舟の人たちから、思いもよらない話を聞かされた。対岸の朝鮮側の道を、父たち四人がソ連兵に連れられているのを見たという。言葉も交わしたらしい。そして舟が下り始めて間もなく、四発の銃声を聞いた。それは、四人に対してではないかという話であった。茫然としながらも信じられなかった。私たちは、間違いであることを祈るばかりであった。

九月十日、目的地の臨江に着いた。が、すぐには上陸できず、その夜は舟にとどまった。その舟に向かつて大勢の満人が、何かわめきながら石を投げてきたのだ。とても恐ろしく、惨めだった。翌朝に上陸を許され、長白からの難民百八十六人は二軒の旅館に収容された。伊佐美旅館の方には、官吏や警察関係などの公務員とその家族、隣の三好館には自営業など民間の人たちが多かった。一室に何家族かで寝食を共にしたが、長白を出てか

の母の手に手を取り合って室外に飛び出してみると、壊れた建具や窓ガラスで足の踏み場もないありさま。その向こうに電灯がともし、「こつちだ！」の声。無我夢中でたどり着くと、各部屋から逃れて集まった人たちのどの顔も青ざめている。気がつくのと、二弟と三弟、そして妹がいない。慌てて見回すと、三弟は少し離れた廊下の瓦礫の中にポツンと一人でいた。でも二弟と妹は見当たらない。人の群れに押されるようにして外に飛び出したのかとも思ったが、外はまだ暗闇で、今も満人の声がかしている。皆で手分けして探していたが、気が気ではなかった。けがをした人も運ばれて来る。便所の中に隠れていた人も連れて来られた。母は、肌身離さず持っていた小さな仏像を手に、一心に祈っていた。

夜が開け始めたころ、ようやく二人とも無事に見つかり連れて来られ、ほっと安心した。二人ともどんな所に隠れていたのか、どれほど心細く恐い思いをしていたことだろう、と思うと哀れにな

ら久々にほっと一息つくことができた。

しかし、それも束の間のこと、街には不穏な動きがあり、満人群衆が暴徒と化し、日本人住宅を次々と襲っているという。それらの暴徒が、我々の逗留している旅館も狙っているというのだ。だが、どこに逃れる術もなかった。

九月二十一日、「今夜らしい」ということで、男の人たちは机や椅子などで入口などをふさぎ、屋根から瓦を投げる準備をしていたという。女、子供たちは押入に隠れ、布団を楯に身を防ぎ、息を潜めていた。暗闇の中、いつ襲われるのか、本当に来るのか、助かるだろうかなどいろいろな考えながら、恐ろしい思いで身を寄せ合っていた。夜半、遠くの方で「ワアッ！」という声が起きて、それが次第に近づき、遂に「バリッバリッ」という建具やガラスをたたき壊し始め、とうとう部屋に乱入してきた。布団や荷物は一瞬のうちに奪われた。しかし、暴徒は人間には危害を加えることなく、その場を去った。すぐさま、「逃げるのよ！」

ってきた。

暴民が潮の引くように去ったわけは、通報によりソ連兵が来て、空砲を発射したためと分かった。この事件で長白関係の方、五人が亡くなられた。一方の三好旅館にいた人たちは、大半が幸いなことに近くの親切な満人医師の家や小屋にかくまわれていたために、人命も荷物も無事だったとのことだ。朝になり、近くの小学校講堂に改めて収容された。その後、満人たちは襲って来ることはなかったが、食べ物売り来たり、あきれたことには、日本人から奪った品々を平然とした顔で売っているのだった。その中には、私たちの荷物に入れていた父の茶碗があった。母は、黙ってそれを買戻した。九月末ころ、煙筒溝へ移動、馬糧倉庫へ収容された。高粱のお粥に体調を壊す人が多かった。十月下旬には、さらに通化へと移送された。

八 通化

通化では、長白の大多数の人が協和街の住宅に

入居した。私たち家族は、父の知人の菊井様と梁田様宅に一時お世話になった。ボロボロの姿の私たちを、ご両家の家族は本当に温かく親切に面倒を見て下さった。あのときの人の情けの有り難さは、今も忘れられない。

四、五日後、両家においとまして、協和街へ移り長白の人たちと合流した。一軒に四、五家族ずつの入居で、私たち七人には四畳半一室を割り当てられた。夜具や炊事道具など、通化の方々のご好意で戴いた。

早速、皆助け合いながら仕事を始めた。例えば、大豆を風呂釜で煮て納豆を作って売る人、これには母も加わった。豆腐やタバコを売り、藁草履を作って売る人もいた。満人の家の手伝い等々、母も皆に助けられながら、様々な仕事をしたようだった。子供たちはマツチ箱作りやお菓子の行商などしたが、家計の助けになるにはほど遠いものであった。私は母の留守の間、弟たちの面倒をみていた。

と元気の出る歌を歌いなさい！」と、大きな声で「箱根八里」を歌って下さって励まされた。それで少しは元気が出たのだった。今も心に残る、忘れられない正月の思い出である。

九 通化事件

二月三日早朝に事件が起きた。当時通化を支配していた八路軍に対し、国府軍と一部の旧日本軍兵士が攻撃計画を立てていたが、それが事前に発覚してしまった。そのために、日本人男子十五歳以上はほとんど全員が、酷寒の中を八路軍に連行された。狭い所に身動きできないほどに押し込められ、苛酷な取り調べや処刑されたりして多くの犠牲者がでた。私たちと同室の人も二人連行されたが、数日後に無事帰られた。しかし、事件当時、子供の私には、何が起きたのか全く分からなかった。ただ、銃を持った八路軍が来たのが恐ろしかった。外では銃声も聞こえている。流れ弾を防ぐため、畳や布団で窓をふさいだ。

その日の午後、戸が激しくたたかれ、一人の若

やがて冬になり、先住者の残した石炭でペチカを焚いたこともあったように思うが、それも数えるほどで、今思うとどのようにしてあの寒さをしのいだのか、憶えていない。食べ物は、主に馬鈴薯を食べていたようだ。が、ときには母は米や肉、卵なども子供の健康を気遣って買って来ていた。特に四弟は、成長が止まったかのようにやせて元気がない。生後七カ月から食べ物も思うように手に入らない苛酷な生活を強いられてきたので、無理もなかった。長引く避難生活で治療も思うようにならずに、病気で亡くなる人もあり、心配だった。

昭和二十一年元旦、いつ日本に帰れるのか、不安の中で新年を迎えた。この日、母は街で餅を買って来ていて、子供たちは歓声をあげた。母も和やかな気持ちになったのか、子供たちに歌を教え始めた。「だれが風を見たでしょう、ぼくもあなたも見やしない……」と皆で歌っているとき、突然のお客様がであった。長白の校長先生である。「もつ

い八路兵が入って来た。武器の探索だったらしく、大人一人ひとりに銃を向け調べた。母にも銃を突きつけ、服を脱げという素振りをした。母は落ち着いた様子で少し笑みさえ浮かべ、首を振り小声で一言二言言ったようだった。すると、その兵士はそのまま去って行った。子供たちは体を寄せ合い、息を詰めて母を見ていた。あのときの母のつつさの行動は、母の強さからだったのか、今も鮮やかに思い出される。

三月に、長白の元県長だった人（満人）が通化に来て母と会い、父、城台正の死が事実であったことを知らせた。長白在住だった方々が集まり、告別式を執り行って下さった。

十 引揚げ

幾度と無くうわさにあがりながらも、実現しない引揚げがとうとう決まった。父を亡くしたことは悔しく残念だったが、母に守られて弟妹無事生きて帰られることは、何よりも有り難いことだった。

九月二日、通化出發。母が三歳の三弟を、私が一年七カ月の四弟を背負い、あとははぐれないように、また皆に遅れないように、ただひたすらに歩いた。六日、梅河江に着き無蓋車に乗った。途中何度も停車しながら奉天、錦州を通り、葫蘆島へ着いた。この日時は、当時船内で記録した人のメモによる。私が記憶しているのは、何日も何日も歩いたことと、そのとき背負った弟の重さだけだった。しかし、十歳、八歳、六歳の弟妹たちも、すっかり我慢して歩いたのだ。六歳の弟は「もう歩けないよう！」と、べそをかいて母に叱られながらも懸命に歩いた。そんな弟の手を引いて下さった方もあった。だから、ギユウギユウ詰めの貨車でも乗れたときにはほっとした。

葫蘆島では船に乗るまでに、検疫のため予防注射や検便、虱の駆除のためのDDTを、頭や背中にかけて真っ白にかけられた。

九月十八日、ようやく貨物船英彦丸に乗船。船底に落ち着き、船が岸を離れたときには心の底か

へ着き、待ちわびていた祖母や叔父叔母と感激の対面をした。お互い情報もなく、心配ばかりの一年余り。話は尽きることがなかった。祖父の死、戦中戦後の食糧不足、各地の空襲や原子爆弾の悲惨さなど、内地も大変であったことを知った。数日後、父方の祖母の待つ島原へ行き、そこで生活することになった。祖母は、我が子の死を信じようとはしなかった。

十一 島原

新しい生活が始まった。一番気がかりだった四男の健康も、治療により快復していった。十月初め、島原市立第二小学校へ通うようになった。三人は、一年間の空白があったため終戦時の学年に、二弟はそのとき新一年生になった。二弟は半年遅れの入学のため、はじめは戸惑いつらい思いをしたようだが、次第に慣れていった。友だちも皆親切だった。

母は早速、生活のために働かねばならなかったが、「ゼロ」からの出發だった。重い荷を背負い、

ら安心した。出されたおむすびの何とおいしかったこと！日本人船員たちの、キビキビした姿も頼もしかった。船酔いした大人たちを横目に、子供たちは甲板に出て開放された気分で遊んだ。しかし、ここまですぐに着きながら残念なことに病気で亡くなる人があり、水葬にされた。

船は九月二十三日、佐世保浦頭に入港した。だがすぐには上陸できない。伝染病発生がないかなど、様々な検査消毒を受け、目の前の日本の陸地に一刻も早く上陸をと、はやる思いで眺めていた。

遂に九月三十日、その日がきた。無事、母子七人日本の土を踏むことができたのだ。日の丸の旗、「お帰りなさい」の声、そして出迎えてくれた叔父の姿に涙があふれた。その夜は、佐世保の収容所に泊まり、長白、通化と苦勞を共にした方々と言葉を交わし、名残を惜しんだ。

翌日、それぞれの故郷へと向かった。私たちも叔父に伴われ、母の故郷長崎県南高来郡口之津町

行商を始めた。小柄な体の母には相当な負担ではなかったかと、今思う。そのころの無理のためか、晩年に背中が曲がってしまった。三年ほど続けたあと、昭和二十四年十一月から教職に復職することができ、中学校に勤務することになった。さらに、住まいもそのころ市営住宅に入居できて、少しずつ生活も落ち着いてきた。とはいっても、六人の子供と姑を抱えての生活は厳しいものであった。皆我がままを言わず、家事もよく手伝ったと思う。祖母は昭和三十五年に亡くなった。我が子に先立たれた祖母の一生も、また波乱に満ちたものであった。

子供たちがそれぞれ巣立ち、母も勤めを退きはじめで自分の時間が訪れ、好きな手仕事や旅行を楽しんだ。孫は何人と聞かれると、子供は半ダース、孫は一ダースと笑って答えていた。その母も、平成九（一九九七）年に宝塚に住む三男夫婦のもとで、八十五歳の生涯を安らかに閉じた。

今子供たちがそれぞれ平穩に暮らしていけるの

は、ひとえに母の大きな力のお陰だったと深く感謝している。また、その母や私たちを助けて下さった多くの方々のご恩も、決して忘れてはならない。父は満州建国の理想を胸に身を挺して働き、満州国の終焉とときを同じくしてその一生を終えた。

戦後六十年、戦争によって多くの人が受けた苦しい体験、大切な人との悲しい別れ、心の傷は今も消えない。戦争では、私たち引揚者だけでなく戦地で戦った兵士の方々、本土空襲、原子爆弾、沖縄戦と、多くの人々が貴い犠牲となり、また他国へも多大な迷惑をかけた。「戦争はいやだ」とどれもが思っているはずなのに、今もお、この地上のどこかで戦火が絶えない。

父をはじめ、平和の礎となった多くの犠牲者の鎮魂と、一日も早くこの地上に真の平和が訪れる日を祈りつつ、この私の引揚記を書いた。

私の歩んだ満州からの引揚げ

佐賀県 田中 晃

一 私の生い立ちと渡満

私は昭和五（一九三〇）年四月十二日に新潟県新津市片町の鉄道官舎で第一声を発した。

当時父は、鉄道省（現在のJR）の新津車掌所の助役の職にあつて、両親、兄、姉、私の五人暮らしの鉄道一家であつた。私がこの世に生を感じたのは、官舎の横を走る列車の響であつた。それからの私は、レールを走る列車の汽笛の音と、もくもくと吐き出されて辺り一面に漂う煤煙とを友だちにして育つていった。昭和十年の年が明けてすぐに、父は新津車掌区から南満州鉄道株式会社（満鉄）に派遣されることとなり、満州国の四平街という所に家族全員を連れて移つた。これが渡満の経緯である。

九州門司港から大阪商船の客船に乗り、三日目